



iPS細胞が入った容器を手に取り観察する
高校生 = 1日、坂井市の県教育総合研究所

iPS細胞観察、特徴学ぶ

坂井 高校生 京大研講座で

あらゆる細胞になる人工多能性幹細胞(iPS細胞)をテーマとした講座が1日、坂井市の県教育総合研究所で開かれた。県内の高校生と高校生物教諭らが、iPS細胞を実際に観察するなどして仕組みや変化の過程を学んだ。

京都大 iPS細胞研究所が2009年から全国で講座を開いており、福井県での開催は初めて。

同研究所の佐藤美子研究員らが講師を務め、30日は県内の教諭16人、最終日の1日は県外の2人を含む高校生40人

が参加した。

高校生は、最初にすいろうく形式のゲームでiPS細胞の特徴を理解。その後、神経や臓の細胞に変化した後のiPS細胞か、変化前ものかどうかを見分ける課題に挑戦した。さらに細胞の核の大きさや、細胞の隙間の状態などを顕微鏡で細かくチェックした。

山腰遙さん(大野高3年)は「iPS細胞への理解が深まった。何にでも変化できるとされる一方、まだ解明されていないことも多いことが分かった」と話した。佐藤研究

員は「福井は高校生、教員とも生物への関心が強い。高校生の中から私たちの後輩が生まれてほしい」と語った。

(重森昭博)